
アヴェリア・クロイツ

上谷 朔也

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アヴェリア・クロイツ

【Nコード】

N47240

【作者名】

上谷 朔也

【あらすじ】

アヴェリア大陸。魔獣の蔓延する中、ガーディアンズと呼ばれる組織があった。

それは魔術や武術を駆使して戦う王国の守り手。アイルたちはガーディアンズ『アスタリスク』を結成して今日も戦う。

その1

「みんな、来るぞ！」

黒衣に身をつつんだ少年が叫ぶ。

街道沿いの草原に、六人の少年少女と魔獣の群れがいた。

「フロントに俺とクレス。ハーフにエスト、ミリィ、クレア。バツクにフィンだ！」

「了解！」

「分かりました！」

「ああ！」

少年たちは応える。

「行くぞ！」

黒衣に黒い髪を風にそよがせ、大剣と共に咆哮するのはア rilル。

ガーディアンズ『アスタリスク』のリーダーだ。

ア rilルたちと対するのは紫色の筋肉隆々とした体をしているハイオーグの群れである。

ア rilルが跳躍し、ハイオーグとの差を零にする。

「うらあ！」

叫びとともに叩き込むのは剣戟だ。

魔獣の胴体を一閃に薙ぐ剣閃は、鋼鉄の棍棒によって止められた。

「ちっ！」

弾かれる大剣。外に逃げていく力を利用して、敵に背を向けることを厭わずその場で一回転する。

そのままア rilルは大剣を駒のように回し、ハイオーグに叩き込んだ。

しかし、図体のでかい魔獣はその外見にそぐわない動きをみせ、後退してア rilルの一撃をかわす。

渾身の一撃をかわされたア rilルは態勢を崩す。

そこへハイオーグの一撃が迫る。

「げっ……！」

ア rilルは回避行動に移ろうとするが間に合わない。

左腕を上げてそれを代償にハイオーグの一撃を受けきろうとしたその時、

ヒュウンッ！ と、風を切る音がした。

後方より虚空を切って風の矢がハイオーグへ突き刺さる。

グワァァア！

ハイオーグの叫びが辺りに木霊する。

「ナイスだ、クレア！」

クレアと呼ばれた少女は「うん！」と返事をするやいなや、風でできた弓からさらなる攻撃を繰り出した。

風の矢はハイオーグに寸分違わずに突き刺さる。

紫色の魔獣が苦悶に喘ぐ隙を見て、少年は間髪を入れずに薙ぎ払う。

グオオオオオ、という叫びとともにハイオーグが倒れた。

「よし、次だ！」

魔獣を仕留めてア rilルが次なる得物へ駆け出そうとしたその時、

「うおわっ！」

ア rilルのすぐ横を一迅の雷が疾走していった。

雷の槍は魔獣に突き刺さり、魔獣は野太い断末魔の声とともに倒れた。

「エスト！ お前、俺まで食らうところだったろうが！」

「知らん。わらわの魔術の射線上にいたそちが悪い」

ア rilルの非難をうけても飄々としている少女、エステイアーデ。

灼熱を思わせる長い赤い髪をたなびかせ、金色の瞳が映える。真紅の魔術ローブを着たその姿はまるで、炎の精霊の化身かと思うほど美しかった。

「せめて一言ぐらいかけろ！」

「気が向いたらの」

「あのやろっ……」

ア ril はひとりごちる。

それでもエスティアーデは以前と比べてだいぶマシになったほうなのである。

ア ril たちと出会ったばかりのころは味方がいようが構わずに範囲魔術を使うぐらいひどかった。

「ア ril ! 戦闘中にばーっとするな ! 」

ア ril ではない、もう一人の少年が叫ぶ。

彼の名前はクレス。

ついさっき風の矢でア ril の援護をしてくれたクレアの双子の兄である。

両手で大剣を使うア ril とは対称に、体を白い鎧に包み右手に剣を左手に盾を持つ典型的な騎士然とした少年である。

クレスは群がってくるハイオーグを剣で牽制しながら言う。

「戦闘中に何を考えていたんだ君は ! 少しの油断が命を落とすぞ

! 」

「わかってらあ ! 」

ア ril に襲いかかろうとしていた新たなハイオーグを剣戟で迎え撃つ。

鋼と鋼が撃ちあう音が響き渡る。

「数が多いな……。ミリィ ! 範囲魔術を頼む ! 」

「分かりました ! 」

ア ril に問われた長い銀髪の少女は言った。

「F e n s e s t i r m a g e l a u f r e d i n t e
r b i t a u g e n s l i s d o u r y u g e n c r i m
e」

可憐な少女の口から魔術の言霊が紡がれていく。

ア ril たちは魔術の影響を受けぬように後方へ飛び退いた。

「O u f i r e n t b u r s t f e n i k i a r y u g
e n d e s s o h a n d a r g e n」

魔力の渦がミルデガリアの周囲を満たし、詠唱が終了した。

「——バーンスクウエア！」

そして、炎が爆ぜた。

魔獣が立っている地面を中心として炎が猛り狂った。

グギャアアアア！

煉獄の炎は魔獣を燃やし尽くした。

「ふう。なんとか片付いたか……」

「そうだな。みんな、お疲れ様」

クレスが仲間にいたわりの言葉をかける。

透き通った蒼い瞳と端正な顔立ちにこれまで何人の女性が心奪われてきたのだろう、と思わせるほどの美少年だ。

「お疲れ——」

「お疲れ様でした」

クレアとミルデガリアもそれにならう。

「……ア ril」

問いかけてきたのは黒真珠のように綺麗な長い髪を両サイドでくくっている、まだ年端もいかないあ少女である。いや、幼女と言ってもいいほど幼い。

少女ながらも整った顔立ちだが、表情に動きが少なくその顔にある瞳はどこか冷たい印象を思わせる。

「フィン、どうした。どこか怪我したのか？」

「……ううん。ア rilは大丈夫？」

「ああ、俺は大丈夫だ。ありがとな」

ア rilがフィンの頭を撫でてやると嬉しそうに目を細めた。

そうしていると三十歳ばかりの男が歩み寄ってくる。

ア rilたち『アスタリスク』は現在、商人団の街間移動の護衛をしている。

この世界アヴェリアでは魔獣が多く出現するため、一般人が街から街へと移動することは少ない。

しかし、商人たちにとってはそうも言っていられない。行商が彼らの生業だからである。

そのため商人が街から街へ移動する際にはア ril たちのようなガーディアンズと呼ばれる戦闘のプロを雇うのが普通だ。

「いやいや、皆さん。まいどのことながら見事なお手前でした」

商人の集団を代表している中年の男が感謝を述べた。

「そりやどーも。おら、早いところ行こうぜ」

「はい。分かりました」

中年の男は馬車の御者たちを促して出発させる。

からからから、と荷車の車輪が響く音がする。

「よっ、と」

ア ril は馬車の荷台に手をかけて飛び乗る。

商人は、売り物とは別にア ril たちガーディアンズが乗れる馬車を用意してくれていたのだ。

「はー。それにしても疲れたな。ハイオーグを相手にするのは今日で何回目だよ」

「仕方ないだろう。そういう任務なのだから」

ア ril がこぼした愚痴をクレスが諷める。

「そうは言うけどな」

「けど、じゃない。僕たちは国民の生活を守る誇り高きガーディアンズ『アスタリスク』なんだ。泣き言を言ってる暇はないんだぞ」

「まいどながら真面目だねえ……」

ア ril は呆れながら息をつく。

「ア ril、そこへ直れ！ 僕がもう一度ガーディアンズの重要性和使命を教えてやる」

「はいはい、また今度な」

「こ、こら！ 待てア ril っ」

追ってくる言葉を無視してア ril は馬車の荷台から飛び出して後ろの馬車へと飛び移る。

移った先の荷台には商人の品物だろう。たくさんの果実があるなか、フィンが一人で本を読んでいた。

「フィン。どうだ、ここにあるりんごでも一緒に食うか？」

「……ア ril。 クレスに怒られるよ」

フィン はア rilの言に本から顔を上げてそういった。

「いーんだって、一個や二個ぐら いばれやしねえ」

「ア rilー！ 」

後ろから クレスの 声 がした。

「君 という人 は！ 大事な商品になんてことをするんだ！」

「うるっせえな、こんだけあるんだから一個や二個ぐら いいいいだろ
う」

「いいわけ無いだろ う！ 僕たちは誇り高き ガーディアンズなんだぞ！ 頼むからみつともない真似はやめてくれ！」

「分かったってーの。 やめりやいいんだろ、やめりや」

「ははっ。 一つ二つ程度でしたら私どもは構いませんよ。 護衛して頂いてるんですから、どうぞ食べますか？」

ア rilと クレスの いさか いを聞きつけた商人が りんごをさし出してくる。

「おー、じゃ お言葉に甘えて」

ボカッ！ と、鈍い音がしてア rilは後頭部に痛みを覚えた。

「いてえっ！」

「いえ、大事な商品をいただくわけにはいきません」

商人の申し出を クレスが 丁重に断った。

「騒々しいの。 そち等は黙っておることができぬのか」

荷台の隅で寝ころんでいた エスティアーデが 起きた。

「わらわは疲れておるのじゃ。 そち等がぎゃぎゃあ申すと寝られぬであろうが」

エスティアーデ・ガルディリア。

生まれは上級貴族のれっきとしたご令嬢なのであるが、なにをどこで間違ったのか現在では アスタリスクの一員となっている。

「エスティアーデは楽しんでるばっかだったろうが……。 どこに疲れる要素があった」

「ふん。 適度に手を抜くのがわらわの美学じゃ」

「その分の負担は誰が背負ってると思ってたんだコラ」

「わらわ？」

「なんでお前になるんだ！ 俺たちだ！」

エステイアーデは傲岸不遜を絵に書いたような女である。

上級貴族の末っ子として生まれたというのもあるのだろう、自身が人から嫌われる事をまったく厭わない。

「はあ……」

ア rilルはため息をつく。

ア rilル、クレス、クレア、ミルデガリア、エステイアーデ、フィン。

この六名がガーディアンズギルド『アスタリスク』のメンバーだ。

その2

その後、護衛の任務は大過なく過ぎ去っていき、ア rilルたち一行は目的地であるサンタディエスタについた。

商業が盛んな地方都市である。

「みなさん、ここまで護衛の任務ありがとうございました」

「ああ。この証書にサインしてくれるか？」

「よろこんで」

商人の男はペンを取り、流れるようにサインした。

「では、私たちはこれで失礼します。報酬はギルドの方で」

「了解だ」

そう言つて、商人の男は御者を促して去っていった。

「さて、仕事も終わつたな。さつさと宿に行くか」

「ああ、そうしよう」

街に着いたらまずは宿に行く。それがア rilルたちの方針である。

ア rilルたちのようにガーディアンズは大陸全土を絶え間なく移動するため、休める時に休むのが基本である。

ア rilルたちは街の中に歩をすすめる。

いたるところに露店や屋台があつた。

「さすが商業都市だな。商売が活発だ」

「みたいだね。うわぁー、見てあれ！」

クレアが路上で次から次へと瓶を投げてそれを落とさず空中で回すパフォーマンズをしていた大道芸人に感嘆の声をあげる。

「すごいな。よくあんなにできるもんだ」

「ア rilル。わらわは疲れた。はよう休ませい」

「分かつたよ。宿行こう」

ア rilルたちは大道芸人や屋台がたくさんある広場を抜けて広い通りをそのまま進む。

少し行くと宿は見つかった。扉を開いて中に入る。

いたって基本的な宿屋だった。

「ちーっす。六人、泊まれるか？」

「ああ、いいよ。一人十ガリア、六人で六十ガリアだ」

宿の店主が答える。

「オーケー。ほらよ」

ア ril はガ ル デ ィ リ ア 銀 貨 六 枚 を 店 主 に 手 渡 す。

「うん。確かに。お客さんたち女の子もいるみたいだけど部屋は別々がいいかな？」

「ああ、そうだな……。おい、どうする？」

「んー？ ボクは別に気にしないけど。ミルデガリアは？」

「あ、私はできれば別々の方が……。あ、いえ！ 決してア ril さ
んたちを信用していないという訳ではないのですが！」

ミ ル デ ガ リ ア は 失 言 を 取 り 戻 そ う か と い う よ う に あ た ふ た と 弁 解
した。

「ははっ。気にすんな。じゃ、おっさん、男二人と女四人で分けて
くれるか？」

「いいよ。えーっと、二人分の部屋が三つでいいかな。はい、これ
が部屋の鍵だ。二階の三部屋ね」

「おっけー」

ア ril たち は 鍵 を 受 け 取 る と 木 製 の 階 段 を 登 っ て 二 階 へ 上 が っ た。
廊下を歩くと、ぎしぎし、と木が軋む音がした。

「じゃ、俺とクレスはここな。クレアたちはそっちの二部屋にして
くれ」

「うん。分かった」

扉の鍵穴に鍵を通し、ア ril と ク レ ス は 一 番 奥 の 部 屋 に 入 っ た。
ベッドが二つにサイドテーブルがあった。

「おー。結構広いな」

「うん、それに清潔だ。言う事はない」

ア ril は 荷 物 を 床 に 降 る と ベ ッ ド に 横 に な っ た。

「ア ril。そのまま寝るのは感心しないな」

「ちょっと横になるだけだつてーの」

窓の外からは人々の往来の声、楽しい喧騒が聞こえてくる。

「賑やかだな」

「そうだな。ア ril、僕は体を洗ってくるぞ」

「おう、行ってこい」

クレスが部屋から出て行く。

一人残されたア ril はぼんやりと天井を見上げた。

——ここまで、いろんな事があったものだ。

旅に出たばかりの頃は決して平坦な旅路と呼べるものではなかった。

魔獣との戦いで深く傷ついたこともあったし、仲間との信頼を失うような出来事もあった。

それでも、どういう訳かここまでこれた。

最初はア ril とクレアとクレスの三人だけだった仲間は六人に増え、ガーディアンズにすらなることができた。

ア ril は感慨に耽っている、こつんこつん、と部屋の木の扉が叩かれる音がした。ノックの音だ。

「あいてるぞー」

ア ril はベッドに横になったまま投げやりに答える。

「お邪魔しまーす。あれ、兄さんは？」

部屋に入ってきたのはクレアとミルデガリアだった。

「浴場に行くんだとさ」

「あーなるほど！ ボクたちも体洗ってからにしようか？」

クレアは後ろを振り返って言った。

「そうですね。ハプスモニ力を出て以来、あまり体を洗う機会に恵まれませんでしたから、今洗っておきましょうか」

「だね。ア ril、また後でねー」

ア ril の部屋を後にする二人。

「……なんだつたんだあいつら。……。俺もちょうくら水浴びてくるか」

ア ril は起き上がり、宿屋の浴場へと向かった。

一階の奥にある扉を開け、浴場へと入る。

服を脱いで浴場へ入った。

ちょうどクレスが出てくるところだった。

「ア ril。君も湯浴びするの？」

「ああ。さすがにこのままじゃ汚いかと思っ てな」

「そうか。さっぱりするぞ」

短いやりとりを交わしてクレスは浴場から出て行った。

「さて」

ア ril は浴場の湯の中へつかる。

「あーこりゃ極楽だな……」

意識を刈り取られてしまいそんな快楽に身を委ねていると、隣の浴場から声が聞こえた。

「うわあ！ いつ見てもミルデガリアのおっぱい大きいよねー」

「や、やめて下さい！ そんなふうじろじろと……。恥ずかしいです……」

「ねね、ちよつと触ってもいい？ ううん、触るね」

「ひゃうつ！ クレアさんっ！？」

クレアとミルデガリアの声だ。

「あいつらは一体なにをやっ てるんだ……」

苦笑するア ril。

そのままア ril は体を洗って浴場を後にした。

宿屋の一階に併設されていた食堂へ足を運んだ。

「おばさん、なんか飲むもんくれないか」

ア ril は食堂を切り盛りしていた中年の女性に言った。

「おー、こりゃ威勢がいい男なこと」

中年の女性は笑いながらグラスに綺麗なサファイア色の液体を注いでア ril に差し出した。

「葡萄酒か、いいな」

ア ril はぐつ、と葡萄酒をあおる。

「かぁー、うめえ！ 湯あみ上がりには冷たい飲みもんに限るな！」

「あんたあ、不思議な子だねえ」

食堂のおばさんが薄い笑みをたたえている。

「あ？ どういう意味だよ」

「敬語は使わないし、態度は粗暴だがなんか嫌いになれない温かい雰囲気があるのさ」

「そうか……？ 自分じゃよく分からないな。敬語使えないのは田舎育ちでな。そういう風習が……まあないこともなかったが、使わなくても生きていけたからな」

「どこの出身なんだい？」

「パライス」

「聞いたことないねえ」

「だろうな。しがない山奥の村だ」

「へえ、で？ あんたはなんで都市にできたんだい？」

「こいつだ」

ア ril は肩の竜と剣の紋章を見せる。

「ガーディアンズかい！ こりやお偉いさんにとんだ口を聞いたもんだね。許しておくれよ」

「ああ、別に気にしないさ。階級なんざどうでもいい」

「それは助かるけど……そうか、あんたあガーディアンズなんだね

「……」

「似合ってないってか？」

「いやあ、そういう事じゃないんだけどさ……」

食堂の主がもの珍しそうにア ril を観察しているところに、クレアたちがやって来た。

「あーっ！ ア ril ずるいよっ。一人でそんな美味しそうなもの飲んで」

「はいはい。お前も飲むか？」

ア ril は小さな酒瓶を差し出す。

「えっ……」

クレアは突き出されたものを前に固まる。

「そ、そんなの飲めるわけじゃないじゃないっ!」

「さっきと言ってることが違うぞ」

「いいのっ! あ、おばさん。ボクにもこれと同じのください」

「はいよ。そっち子たちはどうする?」

おばさんがクレアの後ろにいたミルデガリアとフィンに目を向ける。

「私も同じのを下さい」

「……アリルと同じの」

「分かったよ」

三つの酒瓶が出されて、クレアたちは手に取ってカウンターの席に座った。

「あんたあ、ガーディアンズの上にこんな可愛い女の子三人も連れて……。人生バラ色だねえ」

「あのな……、こいつらも同じガーディアンズの仲間なんだよ」

「ええっ!? ってことはまさかあんた達は……」

「魔術師です」

ミルデガリアが心底、恐縮そうに答えた。

「はあー! その年でガーディアンズの上に魔術師かい! こりゃ凄い子供たちに出会ったもんだ……」

「そんな……。私たちなどただの若輩者です」

「そうそう。ボクたちなんてまだまだだよ」

「俺は違うけどな」

「アリル!。昼間の戦闘でハイオーグにやられそうになったところを助けてあげたのはどこのどなたでしたっけ?」

「……クレア様でした」

「よろしい」

「あはははっ! あはははは!」

「ど、どうしたババア。いきなり笑い出して。イカれたか?」

アリルの頭にこすん、と衝撃が走った。

「いてえっ！」

「いやね、ガーディアンズや魔術師なんて市井のアタシ達にとつちや雲の上の存在なんだよ。それに輪をかけて威張ってる奴らの多いこと多いこと。アンタらみたいなガーディアンズに会ったのは初めてだからちょっとおかしくってね」

「あつそ……」

ア ril は葡萄酒を口に含む。

「ガーディアンズは王国の守り手って言うけど実際は偉そうにしてる人多いもんねー」

「そうですね、やはり特権を与えられているのが問題なのではないか」

「あんた達みたいなガーディアンズが増えてくれりゃこっちも楽なだけどねえ……。ま、こんな話は客の前ですることじゃないね。ほら、飲んだ飲んだ」

そう言われてクレアが一気にあおった。

「あー、美味しいっ！」

「ク、クレアさん……。その、少しばかりはしたないですよ」

「いいのいいの！ ほら、ミルデガリアも飲みなよ」

「は、はい」

ミルデガリアはちびりちびりと飲み始めた。

「……ア ril 。フィンここに座ってもいい？」

フィンは葡萄酒を手にとって、ア ril の膝の上に座ろうとする。

「ああ、いいぞ」

「そんな小さな子までガーディアンズとはねえ。妹さんか何かかい？」

「いや、そういう訳じゃないんだが」

「……フィンはア ril の恋人」

「おやまあ、これは失礼したね。かわいい恋人さんだ」

「おい、言つとくが俺に幼児性愛の性癖はないぞ」

「ほーんとかなあー。ア ril ってフィンには何かと甘いもんねえー」

「そ、そうですよ。フィンさんばかりずる——いえ、特別扱いしすぎです」

「お前らな……」

「あんたらも複雑な関係みたいだねえ」

と、全て分かってるだからと言わんばかりにウィンクしてみせた。

「おい……」

「あ、そういえばエステイアーデはどうしたの？」

クレアが話題を変えた。

「エステイアーデなら部屋にいますよ。どうかされました？」

「んーにや。エステイアーデだけのけ者にするのも悪いかなんて思ってた」

「そうですね……。でも、私が誘ってもきつとエステイアーデは断るでしょうから」

「なら俺が様子を見てくるか」

ア ril は葡萄酒を飲み込んだ。

「行つてらしゃーい」

「フィンはこちらでもう少し飲んでろよ」

「……うん、ア ril がそう言うならフィンここにいる」

「おばさん。葡萄酒美味かったぜ。いくらだ？」

「ありがとうね、四人分で4ガリアだよ」

「ほらよ」

ア ril は銅貨を四枚投げてよこした。

「毎度あり」

食堂の主は満面の笑みをもって受け取った。

その2（後書き）

初めて書く小説です。地の文が壊滅的に下手ですが頑張ります！

その3

ア ril は階段を登って二階に上がった。エステイアーデたちの部屋の前まで来る。

こつんこつん、と扉を叩く。

「エステイアーデいるか？」

「誰じゃ」

扉の向こうからくぐもった声が聞こえてきた。

「俺だ。入っていいか？」

返事が聞こえるより先にア ril はドアを開け、中に入った。

「……………」

エステイアーデが目を怒らせてア ril を睨む。

「この阿呆が！ わらわが着替え中だったらどうするつもりだったのじゃ！」

「眼福かな」

「よしよくぞ言った。そこを動くでないぞ。Kinsest
r u i n s ———」

エステイアーデの体に魔力が満ちていく。

「待て待て待て！ 落ち着け、今のはちょっとした冗談だ」

「……信用できると思うてか」

蔑みの目をア ril に向けるエステイアーデ。

「本当だ。大体だな、お前の着替えなんぞ一緒に旅してるんだから見ようと思えばいつでも見られるだろ」

「……いきなり入って来ておいてそれか。不躰者にもほどがある」

「別にお前の裸が見られたらいいな」なんて思って入ってきた訳じゃない。神に誓おう」

「そちが神と申すか……」

「なんだ。なんか文句でもあんのか」

「なにも。それで？ わらわの部屋に強襲しに来たそちは一体なん

の用があつたのじゃ。くだらん理由だつたら」

エステイアーデの言葉が終わらないうちに、

「いや、特に用はなかった」

「Fris en ego ist archemist mar
chant——」

「オーケー。すみません。エステイアーデ様のご具合とお顔を拝顔
しに参りました」

「最初からそういう態度で入ってくればよいのじゃ」

エステイアーデはベッドに腰をかけ、足を組んだ。

「さて、足でも舐めてもらおうかの？」

「いや、なんでだよ」

「わらわの事を考えて夜も眠れぬのじゃろ？ そちのその下卑た欲
望を少しでも消化してやろうと言うのじゃ。ああ、なんてわらわは
優しいのじゃろう！」

悦に入つた声で言つた。

「俺はそんな趣味はねえ！」

「なんと！」

「心底驚いた顔をするな！」

「冗談じゃ、冗談。仕返しじゃ」

エステイアーデは悪魔のように笑つた。

「あつそ……。で、本当はみんな下で葡萄酒飲んでるんだが、お前
も来るか？」

「行かぬ。面倒くさい」

「お前の頭の辞書には協調性と言うものはないのか」

「きょうちようせい？」

「素で知らないように言うな！ お前、上級貴族出身で教養叩き込
まれてるんだろが！」

「ああ、そうじゃった！ そういえばわらわは行かねばならぬ所が
あつたのじゃ！」

「俺の言葉は無視か。お前も自由に生きてるよな」

「そちには負けるけどのう」

エステイアーデは頬に手をあて、体をもじもじさせて言った。

「恥ずかしそうに言うことじゃないからな？」

「そんなのはどうでもいい事じゃ。ア ril。出るぞ」

エステイアーデはベッドから腰を上げ、ア rilの腕を引っ張っていく。

「本当に自由に生きてるよな……」

その4

そうして、ア ril とエスティアーデが向かった先は宝石屋だった。宝石を眺めるのがエスティアーデの趣味なので当然と言えば当然だった。

店の中に並ぶ数々の宝石。

「はあああ。この輝き……。たまらんのお」

エスティアーデが恍惚の表情を浮かべる。

「宝石のなにがいいのか俺にはさっぱりだが……」

「無粋な男には分らんのかの。ア ril、この宝石を見るが良いぞ」
ア ril はエスティアーデに指された宝石を見る。

「ん？ ああ、これがどうかしたか？」

いわゆるダイヤモンドと言う宝石だ。それくらいはア ril にでも分かった。

「この美しさの秘訣はなんじゃと思うてか」

「知らねーよ。綺麗だから？」

「阿呆。宝石の美しさとは硬度と屈折率なのじゃ」

「はあ」

「ダイヤモンドとは硬度が十であって、この世に存在するどのような物質も傷をつけることができぬのじゃ。この基準をモース硬度と言う」

「へえー、じゃダイヤモンドで俺の剣作ったら強そうだな」

「阿呆。傷をつけることはできぬが、一定の力を加えると割れはする。剣のようなものにはとうてい向いてないの」

「はあ？ この世で一番堅い物質なんじゃないのかよ？」

「違う。まったくもって違う。傷をつけると言う事と割れると言う事は別物なのじゃ。ダイヤモンドは何かでこすっても傷つきはせぬが、一定の方向に衝撃を加えると割れてしまう。その確率を専門用語でへきかい性と言う。これがダイヤモンドはそう強くない」

「ふーん」

「次に、屈折率。光は宝石の表面で反射するものと内部で反射するものに分けられる。ア ril、表面で反射するのと内部で反射するのとどっちが綺麗に見えると思うてか」

「……表面か？ 内部で反射したらキラキラ光るのが見えづらいだろ」

「正解じゃ。ダイヤモンドはその表面反射率が非常に高い。そのことと硬度で傷つかない特性を持つておるから、いつもあんなに綺麗に光っておるのじゃ。分かったか？」

「まあ、なんとなくは」

「ええい、うだつの上がらぬ返事じゃな！ わらわはもうしばらくここにおる。そちは帰るなりなんなり好きにするがよい」

「はいはい。じゃ俺は帰らせてもらっぜ」

そう言っ てア rilは店を後にした。

その5

クレアは買い物好きである。

だからこうして街に寄ったときには必ず買い物に出かける。

もつとも、旅の資金を残しておかなければならないため、大きい額は使えないがクレアは価格の安い雑貨や食べ物を買うのが好きだった。

最初のうちはミルデガリアやフィンなども一緒に行っていたのだが、自分のペースで見て回れるため買い物はやはり一人でまわるのが一番だとクレアは思うようになっていた。

「ふんふんふん」

鼻歌まじりにサンタディエスタの表路地を歩く。

美味しそうな食べ物の匂いや商人の客寄せの声がクレアは好きだった。

クレアが歩いていると、前からいかにもガラの悪そうな男たちが歩いてきた。

「（うわ……、見るからに小悪党っぽい）」

クレアは心のなかでそう言って通り過ぐそうと脇に避けた。

だが、男たちははしゃぎ過ぎたのか、クレアの肩にぶつかった。

「いった」

男は何事もなかったのかのように通りすぎていく。

「ちよつと、君たち。今、ボクにぶつかったんだけど」

「ああ？　なんだお前」

「だから、ボクにぶつかったでしょ。謝るべきことなんじゃないの？」

「はあ？　なんで俺が謝らなくちゃいけないんだよ、おいコラ」

「その態度は人としてどうなんだよ」

「てめえ、舐めてんのか」

「舐めるもなにも、謝ってほしいってだけじゃない。どう勘違いし

「たらそうなるんだよ。やっぱり見た目で人間性が知れるよね」

「……ブツ殺すぞ女」

「やれるもんならやってみなよ」

クレアは後ろに手を回して魔力を集中させる。

互いがにらみ合う一触即発な雰囲気の中、

「おい、お前らなにやってんだ」

宝石店から帰る途中だったア ril が現れた。

「ああ？ てめえには関係ねーよ。失せるガキが」

「わりのがそいつは俺のツレでね。失せるのはお前らだグズ共が」

「死にてえのかてめえ！」

「果たしてそれはどつちかな」

ア ril はそう言うのと肩の竜と剣の紋章を見せる。

「こいつ……！ ガーディアンズか！ くそつ、行くぞお前ら」

捨て台詞を残して男たちが去っていく。

「あ……」

クレアが小さく呟いた。

「……ったく。なにしてるんだクレア」

「な、なにしてるってどういう事だよ」

「あんな奴ら、絡まれたってほっときゃいいんだ」

「……最初から見てたの？」

「いや？ お前らがちょうどにらみ合つてるところで視界に入った」

「それよりお前、魔術使おうとしたな？ 一般人に使ったらどんな

ことになるか分かってんのか」

「………ただじゃ済まないよね。ごめん、軽率だった」

「分かったんならいいさ。ほら、行くぞ」

「な、なんだよその手は」

「手、つないで帰ってやるよ。ほら、ガキの頃よく手つないでやつ

ただろ？」

「は、はあ！？ いいよそんなの！ ボクもう子供じゃないんだし」

「あっそ。じゃ先行くな」

「あ、ちょっと!? 待ってよア ril っ!」
クレアはア ril の背を追って小走りする。
昔から見慣れたその双肩を追って。

その6

アリルたちは宿に戻り一泊した。
翌朝。

小鳥のさえずる声がする中で、頬に何か当たっている感触があった。

「ん……」

アリルは寝ぼけ眼をこすりつつ目を開くと、
「ぶっ!!」

フィンがアリルの上で四つん這いになっていた。黒い髪がアリルの頬をくすぐっている。

「フィン、お前何してるんだ……」

「……ん、もーにんぐこーる」

「意味が分からない……」

「……アリル、おはようのキスは？」

「しないからな？」

「………ちっ」

「フィン、今お前舌打ちしたな？」

「………してないよ？」

「……。フィンがどんどん変な方向に育ってる気がするんだが……」
「………フィンは健やかに育ってますお母さん」

「頭が痛い……」

アリルが頭をかかえると、フィンはアリルの上から、そしてベッドの上から降りた。

そこへ、

「おはよう。ああ、フィンちゃんもいたのか」
クレスだった。

「ああ、ちよつとな……。いつもながら起きるの早いなクレス」
「剣の訓練をしていたんだ」

「そりゃ真面目なことで」

ア ril は投げやりに答えてから背伸びをする。

窓から差し込む陽光が眩しい。朝の清々しい空気を一身に吸い込む。

今日もいい天気だ。

「クレアたちは？ もう起きてるのか？」

「みんなもう起きているようだったぞ。ミルデガリアは一階で紅茶を飲んでいた」

「そうか。クレス、フィン。お前ら朝飯はもう食ったのか？」

「いや、これからだ。一緒に食べよう」

「……フィンも一緒」

「よし、行くか」

ア ril は身だしなみを整えて一階に向かう。

まばらに人が見られる中、ミルデガリアが優雅な仕草で紅茶を飲んでいた。

「おはようございます、みなさん」

口にしていた紅茶をソーサーに戻し、ご機嫌いかがとでも言うような音色の声だった。

ミルデガリアは没落寸前とは言え貴族の出身だ。

そのためか、誰に対しても物腰は丁寧で可憐だ。

「おう。ここいいか？」

ア ril はミルデガリアの前に来て言った。

「どうぞ」

柔らかく微笑む。ミルデガリアはいつだって温厚である。

「……フィンはア ril の隣」

「仕方ないな。なら僕はミルデガリアの隣に座らせてもらおうとしてよ
う」

「あら、クレスさん。私の隣ではご不満ですか？」

「あついや！ そういう訳じゃないんだ……！」

「うふふ。冗談です」

いたずらに成功した子供のようにミルデガリアは笑った。

「何をバカな事やってんだ。そんな事より飯だ、飯！」

「まったく君という奴は……」

「おい、おばさん！　なんかうまいもんくれ！」

ア rilルは声を張り上げて、食堂を切り盛りしている女性に言った。

「はははっ！　今日も元気だね！　よし、サービスで肉つけとい
てあげるよ」

「朝から肉だって……？　いつもながら君の胃腸は正気なのかと疑
うよ」

「別になに食おうがいいだろうが。朝から肉でなにが悪い」

「それはそうだが……」

クレスは気難しげな顔をして反論の言葉を飲み込んだ。

「はい、お待ちどうさま！」

おばさんの手によって料理が運ばれてきた。

ライ麦のパンにとき卵のスープ、色とりどりのサラダ。そして、
鳥のもも肉の網焼きである。

「本当に出てくるんだな……」

クレスがため息をつく。

「おーうまそう！　いったっきまーす」

「もうちょつと落ちて着いて食べれないのか君は。いただきます」

「……ア rilル。フィンも食べていい？」

「当然だ。ほらフォーク」

「……ありがとう。いただきます」

三人は朝食をほおばった。

「うめえ……。やっぱ飯の時間が一番幸せだよなあ……」

ア rilルが至福に満ちた表情で言った。

「ア rilルさん。お食事中にすみませんが一つよろしいでしょうか？」

「あ？」

ア rilルは口の中のを飲み下す。

「なんだ？」

「これから『アスタリスク』はどうするのですか？ サンタディエスタにしばらく滞在するのでしょうか？」

ミルデガリアが小首を傾げる。何気ない仕草に可愛らしさがにじむ子である。

「いや、一度レーネンベルグに戻ろうかと思うんだがな。ガーディアンズの昇級試験もあるだろ」

「そうですね。私は賛成です。一度実家に戻ってお母様たちに顔を見せておきたかったのです」

物柔らかな笑みをたたえてミルデガリアは言った。

「僕も賛成だな」

「……フィンもア ril についていく」

「そうか、ならこの方針で行くか。エスティアーデとクレアも多大丈夫だろ。……ミリィ」

「な、なんででしょう？」

「？ どうしてそんなに驚くんだよ」

「いえ……戦いの時以外にミリィと呼ばれたものですから」

ミルデガリアやエスティアーデのように貴族は基本的に名前が六文字以上である。

普段はそれでもいいが、戦闘の時のように迅速な判断が求められる場合に『ミルデガリア』などと呼んでいると手遅れになってしまう場合や、そもそもメンドくさいと言う難点がある。

そのため、アスタリスクではミリィやエストのように略称で呼んでいる。

「じゃあミルガリ」

「略さないでください！」

ミルデガリアは体を上下に揺らして抗議する。

その揺れに応じて豊かな胸が揺れた。

「おお……」

「……ア ril さん？ なにが『おお……』なんですか？」

「いや、お前の胸が揺れていたからつい」

「な、なななな！ つ、『つい』ではありません！ ひつ、卑猥ですよっ！？」

ミルデガリアは顔を熟したりんごのように真っ赤にさせる。

「わりいわりい。男の性でなあ……」

「こ、今後はそういう事のないようにしてください！」

ミルデガリアが言ったその時、宿屋の入り口からクレアが入ってきた。

「ただいま——って、なにしてるの」

散歩から帰ってきたクレアは微妙な雰囲気を感じとったのだろう。

「なんでもねえよ。クレアには一生関係のない話だ」

「……なんかムカつくんですけど」

「気のせい気のせい」

「むー」

クレアは頬を膨らませながらミルデガリアの隣に座った。

「そっいえばクレア。お前飯は？」

「食べたよー」

「ふーん」

「エスティアーデはどうなんだろうね？」

クレスが疑問を口にした。

「エスティアーデはまだなのではないでしょうか。私が起きたときにはまだ寝ていましたから」

「なんじゃ。わらわに何か用か」

声がしたほうを向くと、エスティアーデが階段から降りてきている途中だった。

「あ。おはようエスティアーデ」「おはようございます」「おはよう」「おう」「……」

「……朝から騒々しいやつらじやの」

エスティアーデは顔をしかめた。

低血圧で朝に弱いたため、機嫌が悪いことが多い。

エステイアーでは、どすん、と椅子に深く腰掛けた。

「これでアスタリスクの全員が揃ったな。ア ril、さっき話していたことをみんなに伝えよう」

「ああ」

ア rilは食事の手を止め、口の中のものを飲み込んで言った。

「えー、これから俺たちは帝都レーネンベルグを目指そうと思う。何か意見はあるか？　ないな。よし、決まりだ」

「待て待て待て！　自己完結してるんじゃない！」

「冗談だろ、冗談。お前ら、なんかあるか？」

「ん。ボクは特にはないかな」

「レーネンベルク、の……。わらわが立ち入れるかどうかは微妙なところじゃな」

嫌そうな顔を隠しもせずにエステイアーデは言った。

「ああ、そうか。お前、搜索願が出されてるんだっけ？」

「じゃな」

「まあでもなんとかなるだろ。見つかりたくなければ麻のフードとかでも深めにかぶればいいんだし」

「気乗りはせぬが、まあよからう。わらわも異議なしじゃ」

「おし、じゃあ目的地はこれでいいな。今日にでも出発するか」

「待てア ril。急ぐ用事はないんだろう？」

「まあ、な」

「だったらもう少しサンタディエスタにいてもいいんじゃないのか？　長旅で疲れた皆の疲労をこころへんで回復するのも悪くない」

「そうですね。これまでなかなかハードな旅でしたから」

過去の旅を振り返ってミルデガリアは言った。

「ふーむ。じゃあ出発は三日後にするか。それでいいな？」

「ああ、文句ない」「りょーかい！」「分かりました」

口々にする三人と、手をひらひらさせて賛同の意思を示すエステイアーデに無言で頷くフィン。

「三日後の朝までは自由行動でいいだろ。お前ら好きに過ごしてい

いぞ」

「なんで上から目線で言われてるのか釈然としないけど、まあ分かったよ。ア ril だもんね」

クレアが言った。

その後、ア ril たちは朝食を平らげた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4724o/>

アヴェリア・クロイツ

2010年10月26日21時10分発行